

# 「葛飾区少年の主張大会」が開催されました

令和3年11月20日(土)、かつしかシンフォニーホールズアイリスホールにおいて、応募総数417人の中から選ばれた小学生17人・中学生8人、計25人が、それぞれの主張を発表しました。結果は次のとおりです。

## ■小学生の部

### 最優秀賞

内野 沙綺(小松南小6年)  
「障害は個性」

内山ソニア(高砂小6年)  
「海の問題について」

### 優秀賞

山田りる(水元小6年)  
「自閉症について知ってほしい」

明慶 春香(川端小6年)  
「心をキャッチ！」

小林 凜(渋江小6年)  
「障がい者だから」

柴崎 叶多(よつぎ小6年)  
「思いやりあふれる社会に」

中嶋 乃菜(綾南小6年)  
「チャレンジ」

### 入選

松本 幸奈(西小菅小6年)  
飯村 みはる(青戸小6年)  
中村 心春(柴原小6年)  
池田 夢音(上千葉小6年)  
石坂 藍子(亀青小5年)  
宇喜多 絢音(二上小6年)

## ■中学生の部

### 最優秀賞

久保 柚巴(金町小6年)  
高橋 真那人(梅田小6年)  
田中 詩桜(住吉小6年)  
森本 彩夢(半田小6年)

### 優秀賞

丸山 愛結(小松中3年)  
「マイナス五百三十万」

平塚 倭士(葛美中2年)  
「平和への一歩」

### 入選

岩田 葉愛(小松中3年)  
高橋 智壮(双葉中2年)  
志村 天歌(亀有中2年)  
木村 夏実(四ツ木中1年)  
中山 瑛蓮(中川中3年)

### 地域教育課

敬称略・同一賞内の順番はプログラム番号順

☎(505054)84482



## 中学生の部・最優秀賞

### 言の葉

葛美中学校3年 細谷 笑里

「ソーシャルディスタンス」「パンデミック」「クラスター」「三密」「巣こもり」……これらの言葉は、コロナ禍で頻繁に使われるようになった言葉たちです。

世界中で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、私たちの生活様式が大きく変化をしました。また、今まであまり耳になかった言葉を頻繁に使うようになり、新たな意味を帯びる言葉も出てきたりました。

東日本大震災のときも、「絆」という言葉が気に多用されるようになりまし

た。あのときの「絆」は、人々が助け合い生き抜くためのスローガンのように感じました。今回の「三密」や「ソーシャルディスタンス」も、コロナ禍を皆で生き抜くために定着していった言葉だと言えます。

しかし、「絆」と何かが違うと感じ、私は言葉に対し強く興味を持ちました。

日本語には中国大陸から来た漢語を中心とした「外来語」と、縄文・弥生時代にはあつたとされる「大和言葉」に大きく分けられます。「大和言葉」は、日本人らしさとも言える繊細な言葉が多くあります。

例えば「雨」に関する言葉として、英語には「文」としての表現はあるものの、日本のように季節や情景を含んだ単語はありません。「春雨」は春に静かに降る雨を、「五月雨」は五月ごろに降る雨であり、「梅雨」という目に映る情景を含んだ言葉もあります。これらは、「葉」のように多くある日本の「言の葉」ならではあり、外国の人たちが、「日本語は美しい」と言つのも納得できます。

また、日本には四季があり、四季それぞれに美しい景色があるように、春夏秋冬を豊かに表現する言葉もあります。数多くの美しい言葉は、昔の人たちが、いろいろな思いを込めてつくり出したもので、過去の歴史の様々な出来事により変化を続けています。

その、言葉に想いを乗せるといふ日本人らしい言葉の「二」に「勿体ない」があります。しかも、日本語の特異性に気付いたのは、環境分野でノーベル賞を受賞したケニア人のワンガリ・マータイさんでした。「無駄」という言葉は他言語にはあるものの、正しい筋道を失う行為や、自然や物に対する敬意などの意味が込められているのは、この「勿体ない」に

はなく、世界共通語として使用されるほど世界からリスパクトされたのです。

では、コロナ禍で身近になった言葉たちについて考えます。「パンデミック」は、ギリシャ語の「全主の人々」という意味から派生したものです。少し前まで良いイメージで使われていた「クラスター」は、もともと果実や房のことを表す言葉でした。日本語のように、海外の言葉にも語源がありますが、日本語に比べると少し無機質な気がします。これらの広く使われるようになった言葉たち、例えば、「パンデミック」が「全主の人々」から、「伝染病の世界的流行」を表すように、「クラスター」が悪い状態をイメージさせるように、マイナスのイメージを前面に押し出す言葉ばかりが広がっていると気付きました。同時に私は、このマイナスなイメージばかりの言葉が、感染症とともに世界で拡大していることに、危機感を覚えています。

私も昨年体験した臨時休校や黙ったままの給食、移動教室やこの少年の主張大会が中止になったことなど、出来ないことばかりに囚われていました。しかし、「プラス」の言葉を発することが、この波を乗り越えるために必要だと私は気付くことができました。

私はまず、「巣こもり」を、巣から「出ない」ではなく、「巣立ちの準備期間」と考え、行動していきます。

これからも様々な社会の変化により、たくさん言葉が生まれると思います。新しい言葉も学びながら、昔の人たちが、いろいろな想いを込めて作り出した美しい日本語を、世界中の人に知ってもらえるよう、まずは私自身が日本語をしっかり学びます。そして美しい日本語を正しく伝えられるようになりたいです。